彼らのとある一日

「確かに俺は暇だとは言ったが、なんでこんなことせにゃなんねえんだよ、あぁ？」

　文句を言うサミュエルの頭には葉っぱが数枚付いている。先程、生垣に潜り込んだ時についたものだ。
　そのサミュエルの肩に足をかけ、塀に上ったベンが顔をしかめて言った。

「仕方ねえだろ。マリアの頼みじゃ……お、あっちだ！」
「ほんとか！？」
「ああ、見えた！」

　塀の上を器用に走るベンに並び、サミュエルも郊外の田舎道を走る。
　なぜ彼らがそんな場所を必死になって走っているのか。
　それは１時間前のことだった。

「サム、ベン、あの、今、お暇ですか？」

　酒場に入ってくるなり息を切らしたマリアにそう言われて、ふたりして顔を見合わせた。

「まあ、見ての通りだ。俺もベンも暇だぜ。採集か？」
「いえ、あの……お手伝いをお願いしたくて」
「手伝い？　俺とサムにか？」
「はい……あの、とても困ってて。手伝っていただけませんか？」

　息を切らして紅潮した頬。心底困り果てて下がった眉尻。潤んだ瞳。
　そんなマリアに見つめられて断れるわけもなく。
　こうしていい年した男が二人、マリアの友人の牧場から逃げたかばいのししを追って郊外を走り回る羽目になったというわけである。

「しっかし……いくら足が速いったってかばいのだろ？　そんなにすばしっこいもんか？」
「サム、お前知らねえのか？　最近、レース用に調教されたかばいのがいてよ。そいつらはええわカーブは直角に曲がるわ……よっと」
「……まじかよ」

塀を降りたベンが前方を指さした。
その先に、麦畑に入ろうとするかばいのししの尻がある。

「ベン、挟み撃ちするぞ。お前、あっちから回り込め。俺はケツから狙う」
「よっしゃ、任せろ」

獣よけの生垣の向こう側にベンが消えるのを横目に見て、サミュエルはかばいのししが入った場所から麦畑に入る。
農閑期で良かった。
そうでなければどやされるところだ。
だが、いざ入った麦畑にかばいのししの姿はない。慌てて周囲を見回すと、反対側の生垣に潜り込もうとするかばいのししの尻を見つける。

「……くそっ」

後ろから追いかけても不利なのだが、そうも言ってはいられない。派手な足音を立てて近づくサミュエルに気づいてかばいのししが振り向いたかと思うと、慌てて目の前の生垣に潜り込んだ。
その後を追いかけて生垣に体を突っ込み、バキバキと勢いよく枝を折りながら一気に生垣を抜けた瞬間だった。

「ぬわっ！？」
「おおっ！？」

間抜けな声を上げて生垣の横合いから走ってきた何者かとぶつかってしまう。
サミュエルはびくともしなかったが、相手はどうやら派手に転んだようだった。

「一体どこから出てきてるんだね、君は！？」

聞き覚えのある声に地面に転がった人物をよく見ると、ブライアンだった。

「悪いな。かばいのを追っかけてたんだ」
「かばいのとは、あれのことかね？」

ブライアンの指さす先を見ると、猛然と走るかばいのししにちょうど畑から出てきたベ

ンが弾き飛ばされたところだった。

「……あちゃあ……」

　額を押さえつつブライアンを助け起こすと、汚れた服を払いつつブライアンが口を開いた。

「もしかして、君たちもマリアに頼まれたのかね？」
「君たちも……ということはお前もか」

　サミュエルの問いにブライアンが得意げにふふんと鼻を鳴らした。

「どうしても私の手が借りたいとマリアが懇願するのでな」
「おまえなんかかばいのに弾き飛ばされんのがオチだろうがよ」
「失礼な！　かばいのごときこのブライアン様の手にかかれば！」
「じゃ、捕まえてみるか？　あれ」

　そう言って指したサミュエルの親指の先に、こちらに向かって猛然と突進してくるかばいのの姿。その後ろには必死でかばいのを追い立てるベンの姿があった。

「おい！！　頼むぜ！！」
「……だってよ。せっかくのベンの頑張りを無駄にするんじゃねえ……おぉ？」

　かばいのからブライアンに戻したサミュエルの視線の先にその姿はなく。さらに後方に視線を移すと、必死に走り去っていくブライアンの姿があった。

「おいおい……何がかばいのごときだよ……」

　もとよりブライアンに突進するかばいのししが捕まえられるとも思ってはいない。
　サミュエルは胸の前で拳を打ち合わせると、突進してくるかばいのししの前に大地を踏みしめて立ちはだかった。
　両者の距離が詰まり、もう少しでその鼻先にサミュエルの手が届くという頃合い。

「……おおっ！？」

　突っ込んでくるかばいのししを捕えようと身構えたサミュエルの目の前で、猪突猛進の

はずのかばいのししが短い脚で華麗なステップを踏んで直角に方向を変えた。

「まじかよ……」
「ばっか！　てめえ、サム！　俺の話を聞いてなかったのかよ！？」

　ベンの怒声に肩をすくめて、サミュエルも走り出す。
　そこへ、いつの間に戻ってきたのかブライアンも並走していた。

「……お前、逃げたんじゃなかったのかよ」
「馬鹿を言いたまえ、サム。タイミングを計っただけだ！」

　いけしゃあしゃあと言うブライアンにサミュエルがなんとも言えない表情を浮かべたところで、後ろからベンが追い付いてくる。

「なんでもいいから追いかけろよ！　逃げちまうだろうが！」
「そういやあ、ベン。派手に弾き飛ばされてたが怪我ぁしてねえか？」
「てめえと違って身軽なんでな。あんなもんなんでもねえよ」

　前を爆走するかばいのししが民家を囲む塀に近づく。その手前で華麗なステップを踏んで方向を変えると、その隣の庭を囲む生垣へと向かった。

「ふう……まずいぞ……はあ……サム……民家に……入られたら……大変なことに……ひい」

　息を切らし、遅れ始めたブライアンに目をくれることもなくサミュエルはベンを見た。

「これで決めるぞ」

　ベンの手にはボーラ。
　それを使おうと走りながら構えた時だった。

「ドライアド、その手を伸ばせ！」

　張りのある声とともに生垣から枝が何本も伸び、かばいのししへと一斉に向かう。

「ウィル！？」

「ベンさん、サムさん、ここは私に！」

　伸びる枝に捕まると皆が確信した瞬間、かばいのししが全力で足を突っ張りブレーキをかける。捕獲対象を見失って絡まりあった枝を尻目に方向を変えたかばいのししに、再びウィリアムの朗々とした声が響いた。

「なんの！　土の小人よ、食い止めろ！」

　ウィリアムの声に応じて土が盛り上がり、かばいのししの動きを止めようとする。だが、短い脚を力一杯地面に叩きつけたかと思うと、その丸い体が軽々と盛り上がった土を飛び越えた。
　その信じがたい光景に、一同の目が大きく見開く。

「そんな馬鹿な！？」
「おい、ベン！　あれは聞いてねえぞ！？」
「俺もあんなの見たことねえよ！」

　そろそろ息が切れ始めたサミュエルが、とうとう足を止めた。
　ブライアンはとうの昔に姿も見えない。

「サム、てめえは後で来い！　とりあえず俺はウィルと行っとくからよ」
「はあ……悪いな。ウィル、頼めるか？」

　肩で息をしながら顔をしかめるサミュエルに、ウィリアムが微笑んで頷く。

「ええ、もちろん。私もマリアに頼まれた身ですので」
「なんだよ……。結局いつものメンバー全員に頼んでんじゃねえか？」

　サミュエルのぼやきに、ベンが鼻で笑った。

「そんなもん当たり前だろうが」

　ベンの言葉にサミュエルが思い切り顔をしかめた。
　考えれば当然の話なのだが、若干浮かれてしまったことが悔やまれたらしい。

「……うるせえよ。とっとと行きやがれ」

苦虫を噛み潰したような顔で唸るサミュエルに、ウィリアムが苦笑を浮かべて言った。

「じゃあ、私たちは先に行きますね。サムさん、また後程」

そのまま、踵を返して二人して走る。
かばいのししのあの様子だと、かなり距離を稼がれてしまったのではないだろうか。
農閑期だから入られた場所が畑ならばそれほど被害はないだろうが、あの速さで街中を走り回られてはどんな被害が出るかわからない。

「ウィル、かばいのが行きそうな場所、わかるか？」

もはや姿も見えない相手を探すのに足跡などの方法はあるが、町中では少々難しいし時間もそれほどかけられない。
尋ねたベンに、ウィリアムはあっさりとうなずいた。

「ここに辿り着いたのと同じ方法を使います。シルフに音を集めてもらって、その中から目的の音を聞き分けてその場所へ向かいます」
「よし、すぐやってくれ」
「もう、やってますよ。こちらです！」

さすがとしか言いようがない。
このエルフは人が良すぎて騙されやすいくせにこういう場面では滅法頼りになる。
ウィリアムについてしばらく走ると、住宅地に差し掛かったところでかばいのししの独特のフォルムの丸い尻が視界に入った。

「いた！」
「石畳の道に入る前に勝負をつけないと厳しいですね。私がノームに命じて土を盛り上げますから、ベンさんはスピードが緩んだ隙にボーラを当ててください！」
「わかった！」

ことは急がなければならない。
風の精霊の力を借りてスピードを上げたウィリアムが土の精霊に呼び掛ける。

「土の小人よ、阻め！」

　ウィリアムの命令に応じてかばいのししの前方の土がぼつぼつと敷かれ始めた石畳を巻き込んで一気に盛り上がる。
　民家への影響を恐れて道幅ギリギリまでは山を作れないが、そうできたなら完全に阻めたほどの高さを持っている。
　その代わり、人工物である石畳を押し上げるほどの土を使ったために消耗が激しいのかウィリアムはその場で足を止めてしまった。
　だが、十分だ。
　飛べないと踏んでそれをよけようとかばいのししがスピードを緩めた瞬間に、ベンの手からボーラが抜けた。
　ベンの手を離れ、きれいな直線を描いてボーラが飛ぶ。
　重りに導かれた紐がかばいのししの足に絡みついた……はずのその瞬間。

「ええ！？」
「ぁあっ！？」

　かばいのししの短い脚をすり抜けてボーラは地面を滑った。
　驚愕するウィリアムとベンをその場に残し、かばいのししは悠々と盛り上がった土の横をすり抜ける。

「まさか、足が短すぎてボーラが絡みつかないなんて……」
「あんなの反則だろ……」
「やっぱり、サムさんが来るのを待って捕まえてもらうしか……」
「そんなの悠長に待ってたらいつになるかわかんねえだろ！」

　想定外の状況だが、足を止めるわけにはいかない。
　精霊魔法を一度に使いすぎてばててしまったウィリアムをその場に残し、ベンは盛り上がった土を乗り越えてかばいのししを追いかけた。
　せめて、サミュエルがいる方向に追い立てなければ勝機はない。相手のスピードを考えると挟み撃ちしか手がないのだ。
　できれば、一本道で。
　後ろから石を投げ、かばいのししの進路を調整してサミュエルと別れたあたりへ誘導していく。
　都合よくサミュエルがいればいいが、そうでなかったらどうしたものか。
　そんなことを考えながらかばいのししが曲がろうとした方向に石を投げて方向をそらせた時だった。
　反対側の路地から出てきた何かが勢いよくかばいのししにぶつかった。

「うわあ！？」

　不意を突かれたせいで転がったかばいのししに再びボーラを投げた。
　投げたボーラはかばいのししの腰付近に絡まり、さらに立ち上がろうとしたかばいのししの足にまとわりつく。
　おかげで走るスピードが落ちたかばいのししに勢いよくとびかかった刹那、何かがベンの顎を直撃した。

「うご！？」

　勢いよく暴れたかばいのししに振り払われたボーラの重りがベンの顎に見事命中したのだ。

「う、うぐうう……」
「あああ、せっかくのチャンスを……」

　背後から聞こえたうめき声に涙目で振り返ると、そこに転がっていたのはブライアンだった。どうやら、かばいのししとぶつかったのは彼だったらしい。

「く……そぉ……」

　追いかけねばと思うもののあまりの痛みに足が進まない。
　もはやこれまでか。
　そう思った時だった。
　前方を走るかばいのししが、唐突にコロンと地面に転がった。

「……？」

　突然の展開に思わず足を止めたベンの前で、路地から出てきた人物がかばいのししの両手両足を縛り始める。

「……てめえ、ウォルター……」

　ベンの怒りに震える声にちらりと視線を向けると、ウォルターは呼び出したスケルトンにかばいのししを抱えさせた。

「君がちょうどこのルートに追い込んでくれたおかげで麻痺魔法をかけやすかった。礼を言おう」
「いや……礼っておめえ……」

　どうやらうまく利用されたらしい。
　そのことに気付いて歯噛みするが、すでに遅い。
　かばいのししを奪い返そうにも相手がウォルターでは下手に手が出せない。

「では、私はこれをマリアに届けてくるとしよう。めでたく片付いて何よりだ」
「ちっともめでたくねえよ！」
「では、私はこれで失礼する」
「ちょ……っ」

　追いすがる前にウォルターとスケルトンの姿はベンの目の前から掻き消えてしまった。
　そこへ、片手に持った酒瓶を傾けながらサミュエルが路地から姿を現した。

「なんだ……？　ベン、えらく男前な顎になってるじゃねえか」
「うるせえ」
「かばいのはどうした？」
「じいさんに盗られた」
「あぁ？」

　一瞬気色ばんだサミュエルだったが、ベンの顎とよろよろのブライアンを見て何かを察したらしい。
　大きなため息を一つついてベンの肩を叩いた。

「……先にウィルが酒場で待ってるからよ。行くか」
「ちっ、俺は今日はワインしか飲まねえぞ」
「わかったわかった」

　ぽんぽんとベンの肩を叩いたサミュエルの視線が背後で茫然としているブライアンを振り返る。

「お前はどうする？」
「……私は高級ワインしか飲まないからな」

「それは自分で何とかしろ」

　その後、珍しくブライアンを含んだ四人の男たちが、酒場でくだをまいたのは言うまでもない。
　ちなみにかばいのししをマリアの元に運んだウォルターだったが、足を縛って運んだせいで痛めさせてしまい、レース用としては使い物にならずに相手を激怒させてしまったことを付け加えておく。
　その後、しばらくマリアに口をきいてもらえなかったことも。